



教授訪問



消化器内科学

おか
岡

し ろう
志 郎 教授

今回は消化器内科学の岡 志郎先生にお話を伺いました。

Q 学生時代と消化器内科を選んだきっかけ

A 大学時代の思い出は、部活動一色でした。合気道部に所属していて、主将も務めていました。5年生の西医体が終わってから勉強に勤しんだ感じです。

学生時代の頃から漠然と内科医になりたいという思いがありました。当時は内科を2年間かけてまわる内科ローテーションがあったのですが、1年目の後半には広島市立安佐市民病院で働く機会を得ました。そこで実際に胃内視鏡（胃カメラ）に触ったときに、非常に面白いと感じたのが消化器内科を選んだきっかけです。単純に内視鏡操作そのものが面白かったということ、自分で病変を発見した時の喜びに魅せられました。

Q 消化器内科の魅力

A 消化器内科が対象とする臓器が多いこと（食道・胃・小腸・大腸・肝臓・胆嚢・膵臓の7臓器）や良性疾患から悪性疾患まで幅広く扱うということ、基礎医学から臨床医学までを研究できるといった選択肢の多様性が消化器内科の魅力の一つだと思います。

また、内視鏡検査・治療などの手技が多いということも魅力です。特に早期消化管がんは診断から治療まで全て消化器内科で行っています。技術の進歩に伴って、消化器内科でできることがどんどん広がっています。

そして広島大学消化器内科では女性医師に対してのキャリアアップも積極的にサポートしています。関連病院と一緒に女性医師の会などを定期的で開催し、女性医師にとって働きやすい環境にするといったシステムの改善に医局を挙げて取り組んでいます。

他にも、国際交流や国内留学などのコラボレーションも幅広く行っています。

Q 先生のご研究について

A 大腸がんの発育進展メカニズムの解明や、カプセル内視鏡などの新規モダリティを用いた小腸疾患の病態解明、医工連携で人工知能（AI）の開発、新たな内視鏡診断・治療の手技の開発などを主軸にいろいろなことを行っています。

また消化管がん（主に大腸）に対する内視鏡切除後のゲノムマーカーを用いた転移・再発の予測や開発、がんの浸潤・転移に関与する分子病理学およびゲノム解析なども行っています。大腸がんの治療に関しては、現在「大腸癌治療ガイドライン」の委員も担当しています。

小腸に関しては、広島大学は5年連続カプセル内視鏡件数が世界一ですが、その中で画像強調技術の開発やAI診断の開発にも積極的に取り組んでいます。

また、内視鏡機器の開発では、企業や広島大学や他大学の工学部の先生方と協力して、3D内視鏡をはじめとする新規の内視鏡技術やモダリティの開発にも携わっています。

Q 学生へのメッセージ

A 学生のうちにストレスを発散できる何か楽しいことを見つけておくの良いかもしれません。私自身、学生時代はまさか英語で講演やライブデモンストレーションをするとは夢にも思わず大学時代に英語の勉強をすることはなかったのですが、将来を見据えて英語の勉強も大事かなと思います。私は歴史小説が好きなのですが、本を読むことも生き方のヒントなどを得られるため良いと思います。

内視鏡に触れたことが消化器内科を選んだきっかけとなったので、実際に自分で医療機器や手技を体験することを大切にしてほしいです。そしてどの分野でもいえることですが、日常診療のなかで新しいことはないかと探す視点（クリニカルクエスチョン）をもつことは大切です。また、専門性は大事ですが、研究対象として興

味のあるもの3つくらい持つておくの良いと思います。研究にも流行りがあり、長い人生の中ではその方が長続きすると思います。

最後に、失敗しても後ろ向きにならないことです。人生で一番若い現時点でベストを尽くすことが大切です。

教授訪問を終えて

先生の学生時代のお話から、現在取り組んでいる研究など非常に多岐にわたってお話をお伺いすることができ、大変勉強になりました。

消化器内科の魅力についてたっぷりとお話しをいただき、非常に魅了されました。

学生へのメッセージで頂きましたお言葉はこれから病院実習が始まる私たちにとって非常に励みとなりました。

最後になりましたが、ご多忙の中、お時間を割いて頂き誠にありがとうございました。

広仁会々報編集委員 医学科4年 池野 葉
医学科4年 野林紀世乃

